水神のルーツと生活文化
——貴船と阿蘇の水神探訪から——

佐　藤　ひろみ

An Origin of the God of Water and the Japanese Culture in its Life-style: An investigation of the god of water at Kifune Shrine and Aso Shrine

Hiromi Satou

はじめに

水神というと具象的な形態として、龍をイメージすることが一般的である。龍は伝説や昔話に登場する想像の霊獣であるが、水のシンボルとして日本人の生活文化の中で身近な存在である。神社仏閣には龍を刻んだ柱や龍画の天井絵が数多くみられ、仏教の守護神、火伏せの神としての役割を果たしている。洛北の天龍寺、花園の妙心寺、泉湧寺、大徳寺など、寺社の水源を訪ねた折りに出会った天井絵は、いずれも威圧的な迫力で龍が描かれ、仏法が説かれる法堂を護っているかのようでもあった。また神仏を参拝する前に、手を洗い口を漱いで心身を清める手水舎や手水所の柱や天井絵にも龍は見られ、手水鉢の石彫や吐水口は龍を形どったものが多い。さらに日本の名水と指定された水源地においては、水神を祀った水舎の他に龍をモチーフとしたものが各所で見受けられた。洪水に遭遇した釈迦を龍が救ったという故事にあるように、以来仏教の守護神として寺社の建造物を火から守る龍。八方を威嚇し仏教寺院の権力の象徴であるかのような龍。水舎に祀られ龍神となって水を守る龍。水源地では名水のシンボルとなっている龍。我々日本人はとにかく龍にこだわって生きてきた。なぜこれほどまでに龍が生活の身近に存在するのであろうか。寺社や名水の水源を訪ねる度に水神として祀られる多くの龍に出会った。水神のルーツ探しは、これらの日本の龍との出会いから始まる。古代より水稲農耕を中心とし、水とのかかわりが密接な日本の生活文化の中で、水神の占める位置や役割は重要である。脈々と受け継がれ祀られて来た水神（龍神）の起源とは何なのか。そしてここではなぜ龍として具象化されるようになったのかという素朴な疑問点を模索しようとするものである。いうまでもなく、水神は蛇神を基底とする伝統的な系譜があり、龍蛇を水神とみなす考えや水源地の池や淵の伝説となりその象徴として見かける河童なども具象化の姿として見落とせない。また水神はこれらの他にも世界の各地で様々な動物具象の姿をとるとされている。しかしここでは水神のルーツを探る第一歩として、寺社や水源地で出会った日本の龍に注目したい。そこで今回は、水神を御神体として祀り、雨乞い祈願などの水神祭祀が盛んに執り行われてきた京都鞍馬の貴船神社、阿蘇山の火口を水神（龍

神）健磐龍命（たけいわたつのみこと）の御神体として祀る阿蘇山上神社（阿蘇神社奥宮）、そして同様に健磐龍命を祖先神の祭神とし、「衣そそぎの神事」の秘儀が伝わる麓の阿蘇神社を訪ねた。本稿ではそこで出会ったことをもとに水神の起源や由来について生活文化史的な視点から考察を進めたい。

1．鞍馬・貴船神社と雨乞い神事

貴船は京都御所の水源涵養林として、古来より手厚い保護を受けて現在に至っている。貴船社は貴船谷の樹林に囲まれ、清冽な貴船川の渓谷に位置している。東は鞍馬山に連なり、昔は高雄山より一列の山並みをなしていたという。貴船の地名の由来は、大地全体から生命生気である「気」が龍の如くたち昇るところ、気の生まれる嶺あるいはその根元であるということから、気生嶺、気生根（キフネ）と呼ばれるようになったともいわれている。境内にある桂の御神木がその象徴となっている。元の社殿（本殿であったが貴船川の氾濫により流された）があった奥宮神殿の下には竜穴といわれる井戸があり、それが貴船社のご神体であるという。残念なことにそれを拝観することは出来なかったが、神殿付近の地形からその地下に湧水が噴き出す井戸があることは充分考えられる。貴船神社要誌によれば、奥宮の御祭神は「高龗神」と記されており社伝によれば、「闇龗神（くらおかみのかみ）」、「罔象女神（みずはのめのかみ）」、「国常立神（くにのとこたち）」、「玉依姫（たまよりひめ）」、あるいは「天神七代地神五代」、「地主神」とも伝えられる。治水・祈雨・止雨の水神であり、豊饒を祈る農業神である。また「高龗神」の「龗」の字の「靈」は雨乞いの意で、降雨を祈祷して祭器を三つ並べた字ともいう。その下に水神の「龍」を重ねてすさまじいまでの雨乞いを表現している。

高龗神（たかおかみ）：「龗（お）」→「靈（雨乞いの意）」降雨を祈願して祭器を三つ並べた字・「龍」

またクラは谷、タカはタケ（岳）に通じ、高い所や天空をさす。オカミとは雷神のことである。突如として稲光りして雨を降らすのがクラオ神、遠雷となって雨を止めるのがタカオ神である。罔象女神は平安京遷都のとき、大和の都の故事にならって吉野川上流の丹生川上社から勧請したものであり、火の神、迦具土神（かぐつち）の尿（ゆばり）より化生した神であるといわれている。ミズハノメとは、耕地の灌漑に使う引き水の音を、女性の小便のすさまじさにかけたものであるという。また、神武天皇の皇母・玉依姫命は、「雨風の国潤養土の徳」を尊び、その源を求めて黄船に乗り浪花より淀川、鴨川をさかのぼり、その川上貴船川の上流のこの地に至り、清水の湧き出る井戸「霊境吹井」を認めて水神を祀ったと伝えられる。（社記）奥宮の傍には、玉依姫が乗ってきた黄船を地下に納めた跡に船形に石を積んだ貴船石（船形石）がある。これは奥宮神殿下の竜穴といわれる井戸ともかかわりがあり、女陰信仰と結びついているといわれる。今では石積みをして航海の安全を祈願する人も多いという。

雨乞い神事：また本宮の境内にひときわ目立つ大きな絵馬があり、そこにはかつて雨乞いを祈願して献上された神馬である白馬と黒馬がそれぞれに描かれている。祈雨（雨乞い）にはその犠牲として黒馬や牛を献じ、止雨には白馬が奉られた。いわゆる殺牛（馬）祈雨（止雨）である。要誌には嵯峨天皇が勅使を遣わされて降雨を祈られたのが文献上の初見で、以後はしばしば炎旱の時には黒馬を、長雨の時には白馬を献じて雨乞雨止みを御祈願され、これが絵馬の発祥となったと記されている。貴船社では天皇の勅命により、国家的な雨乞い祈願が執り行われ、水神祭祀が行なわれていた。古くは、馬（首）を淵に投じて雨乞いを祈願したという由来は衝撃的であるが、古代において農耕生産に降雨は必須であり、まして旱魃は人間の死活問題にかかわるもので

あったということを考えると、このような凄まじいとも思われる雨乞い祈願が行なわれていたことが理解出来よう。これと類似した雨乞い話は朝鮮の農民のあいだでも行なわれていたと伝えられる。雨乞いの多くは龍王の祭りであり、村の龍王廟にご飯や餅をそなえて稲の豊作を祈り、旱魃には龍の怒りを鎮めるために虎の頭を龍の棲む川に捧げたという。（韓国神話の研究）ここでの動物犠牲は牛馬から虎となるのであるが、農耕生産の豊作・五穀豊饒を祈願することに変わりはなく、どちらもすさまじいばかりの雨乞いがとりおこなわれていた。農耕を中心とした生活の酷しさや、自然に畏敬を抱きながらの生活が切実に伝わってくる。

こうした祈雨祈晴の祈願の他に疫神（疱瘡神）としての信仰も、古来より盛んであったことをつけくわえておきたい。社記によれば、後奈良天皇は疫病流行の除厄を祈願し、徳川家光は疱瘡平癒を祈願している。疫神は水神とかかわりが深いといわれる。貴船の水神はこのような疫（厄）神としての役割も果たしていたわけである。

社務所の神職の説明によれば、貴船は東の鞍馬山とともに大自然の万物のエネルギー「気」が生ずる所であり、「キフネ」はその根元「気・生・根」を意味しており、その「御神気」に触れるだけで元気がよみがえるという。そのため運気発祥の信仰が盛んで、今では先の航海の安全祈願も加わり、商業、学業、縁結びの神としてあらゆる願い事で参詣する人が多いとのことである。和泉式部は恋を祈り平実重は蔵人昇任を祈願、大宮人は加茂競馬の必勝を祈念し、源義経は源家再興を願いそして家光は疱瘡平癒を祈願した。貴船信仰は各地に五百社を数えるという。筆者は社務所で神馬鈴となった白馬と黒馬の一対を求め、水恵を祈って貴船社境内を後にした。

2. 雨乞い・水神と龍神信仰・龍蛇

（1）雨乞い

次にここでは前述の「雨乞い」についてもう少し詳しく見てみたい。日本民俗事典によると雨乞いの方法を大きく次の5つに類型化している。

①山頂で火を焚く型、②唄や踊りで神意を慰め雨乞いをする型、③水神のすむ聖地を汚して、神をおこらせ、雨を降らせようとする型、④神社に篭もり降雨を祈る型、⑤聖地から水をもらってくる型、である。①の方法は、最も広く分布するもので、山上に薪を積み上げ火を焚いて、鉦や太鼓をうちならして大騒ぎをする。②の唄や踊りは雨乞い踊りと呼ばれ、村の寺院や神社の境内でおこなったり、村中の者が総出で練り歩いたりする。③は前述した雨乞いの型はこれに属するもので、例えば、水源である池に汚物をわざと捨てたりする。牛馬の心臓とか馬の頭蓋骨だったりする。この他に寺の釣り鐘を滝壷へ投げ込む所もある、と記述されている。④お篭もりは、神社に祈願する際の一般的行為であるとされているが、雨乞いのための参篭はとくに積極的であり、昼夜一睡もせずに神前に立って降雨を待つ立待ちの方式がとられたりする。⑤水神や龍神のすむ池から水をもらってきて、村の神社・水源地にその水を撒く。利根川流域の茨城県では水戸の雷神社の水がもらわれるという。これらの他に特異な例として、日照りの時に女が相撲をとったり、からの葬式をだしたりするもの（秋田県）や柱の先端から張り渡した綱を、蛙に扮した男が伝わって降りるもの（千葉県）など、この他にこの5つの類型の変形型や混合型がのものもかなり多いとされている。（大塚民俗学会、1991、p.14-15）この5類型は文化人類学辞典でも同様であるが、日本および世界各地の雨乞いの例が、より具体的に付記されている。例えば、③については、ふだんは神聖視さ

れているものを冒涜して神をおこらせ、強制的に雨を降らせようとするものであるとし、禁忌を破るというやり方は、ほかに、地蔵を縄で縛り上げて川につけ、打ったり、叩いたりする例をあげている。(石川・梅棹・大林他、1990、p.21)(この他にも多くの具体例があげられているが、世界各地の雨乞いの例とともに省略する。)

こうした各地で行なわれていた様々な雨乞いの方法は、いかにその時代の人々が降雨に頼り、農耕を中心とする酷しい食糧生活にあったということをうかがわせるとともに、農耕神としての機能をもつ水神を祀る必然性がうかがえる。前述した貴船社の雨乞い祈願はこのような時代に朝廷による国家的祭祀として行なわれていたものである。

(2) 水神と龍神信仰

次に水神と龍神について、日本民俗辞典・日本民俗大辞典より以下に抜粋したものを示しておく。本稿では一応、次のように両者の範囲を捉えている。

水神:水神とは水にまつわる神の総称で、川神・井戸神を含めて、神格は実に多様である。水神の神格において注目されるのは田の神との関連で、豊作を祈って行なわれる田の神祭が苗代や田の水口を祭場とするのは、稲作における水の重要性を認識させ、水神と田の神とが結合しやすいことを暗示させる。また水神は具象性をもって語られる場合には蛇である例が多いが、妖怪としての河童も注目される。また水神の祭りは夏に中心がおかれ祇園や津島の天王祭などと結びつき、疫祓的面が強調されている。もともと稲作にとって最も重要な水を得るという念が強かったと考えられる。(日本民俗事典、1991、p.368-369)年中行事のなかで水神がまつられるのは夏季に多い。6月の祇園・津島などの天王信仰にもとづく行事が代表的であるが、(略)疾病の災厄をはらう目的で営まれたものである。このほかにも五月節供・六月朔日・七夕・盆・十五夜などの行事にも水神祭祀としての要素葉繰り返しみられる。(日本民俗大辞典　上、1999、p.902)

龍神信仰:龍は古代中国における観念上の霊獣で、わが国の龍神信仰は中国の影響をうけていることは否めないが、その基体は、水神の表徴である蛇信仰にあったと考えられる。民間では龍神・龍王・龍宮などのことばが用いられているが、いずれも龍信仰と結合して発生したものであろう。龍神は古くから水田耕作を基本的な生業としたわが国では、その生産に不可欠な水を司る神として信仰され、農耕生産と結びついて民間に浸透した。雨乞いが龍神が棲むと考えられる淵もしくは池沼で行なわれるのは、全国的な慣習である。水神としての龍神は雷神信仰とも結びつき、龍神は、しばしば龍巻きによって天にのぼると考えられている。龍神は、一方漁業生産とも深くかかわり龍神祭が広く行なわれる。(日本民俗大辞典　下、1999、p.801)

いずれも稲作を中心としていた日本においては、豊作を祈念することと深くかかわり、古くは水を呼ぶといわれる蛇信仰を源流とするものであったということになる。

(3) 龍蛇について(東方の龍と西方のドラゴンそして日本の龍)

次の阿蘇の水神(龍神)を述べる前に、ここで龍蛇についての荒川の説を紹介しておきたい。

日本の龍は雨を降らせ農民を助け、中国の龍は皇帝のシンボルとなった、バビロニアのティアマトは反秩序の象徴であり、インドのナーガは釈迦を護る」と世界各地の龍の性格を分類し、東方(アジア)の龍と西方(ヨーロッパ)のドラゴンの違いを分析している。そして

日本の龍については「仏法の守護神であり、権力のシンボルであり、水の神である」と述べている。そして中国やメソポタミアでは「龍は政治化された蛇である」と定義し、さらにインドとエジプトにおいて蛇が龍化しなかったのは、インドには大型のキングコブラが棲息しており、一方エジプトには猛毒をもつコブラが棲息していたため、あえて特別な怪獣を想像する必要はなかったのではないかと推論している。(荒川、1997、p.13-74) 日本の龍としては、ヤマタノオロチ伝説をあげ、スサノオノミコトはそれを治めた治水の技術者であるという荒川独特の治水説を推論している。またアマテラスもサルタヒコも蛇の神であり、記紀の時代の人々にとって三輪山は天の神とむすびついた日の出の山であったが、縄文時代以来蛇の信仰を受け継いだ豊饒の山、雨の山であるという。(荒川、1997、p.155-180)

本稿から少々話がズレてしまったが、龍の性格を世界的に把握できるものとしてとりあげてみた。龍を中心とした世界文化史的発想が活気的で、蛇との関係も明解であり壮大な研究と推論は、日本の龍を考察するうえで欠かせない著書であると思われる。蛇については吉野の著書に詳しいが、ここでは省略して次回に述べることとする。これらのことを踏まえた上で、次には日本の起源神話の舞台でもある九州阿蘇における水神の起源について見て行くことにしたい。

3. 阿蘇山頂の水神と阿蘇信仰

一昨年の秋、阿蘇山山頂にある阿蘇山上神社（阿蘇神社奥の院）を訪ねる機会があった。最近、火口からの噴出量が激しくなったせいか、コンクリート造りの無人の神殿は傷みも多く、殺風景な印象であった。後に麓の阿蘇神社で聞いたところ、昭和33年の大噴火で被害に会い建て替えられたものであり、それ以来無人の状態にあるという。神殿は御神体である噴火口を背後に控えて位置しており、訪れた日は火口からの噴出量が多く神殿周辺には強い硫黄臭が充満し、噴火粒が飛んで来るほどであった。噴火口にかなり近い場所に神殿が祀られて来たことを実感する。また神殿の左側の山の山頂には馬頭観音と石彫の水神が並んで祀られている。これもやはり噴火口を背にしている。(この二つの祭神は、阿蘇神社で確認したところ、坊中の西巌殿寺（さいがんでんじ）のもとにあったものであり、寺の管理にあるものだという。後に触れるがかつて山頂には山伏を主とした多くの修験道の寺があり、祈祷仏教が盛んな時代があったといわれている。西巌殿寺はそうした寺の総称で、その頃のものは山頂の古坊中に遺蹟として残っているという。) 阿蘇の地名については諸説があるが、日本書紀によれば阿蘇津彦・阿蘇津姫の二神が人の姿となって現れ「吾二人あり、あぞ人なけむ」と答えたので、アソというようになったと伝えられる。今でも活発な火山活動が続く阿蘇山には噴火口を神体とする火山神の信仰が古くからあり、後に阿蘇谷の農耕開拓神である国造神の信仰が発生し、阿蘇神社ができたという。阿蘇神社の祭神は健磐龍命（たけいわたつのみこと）・阿蘇姫命（あそひめのみこと）・速瓶玉命（はやみかたまのみこと）であり、具体的人格神であるといわれる。速瓶玉命は阿蘇谷の水分（みまくり）の神であり、その父である健磐龍命は阿蘇火口の神である。「国造本紀」によれば、神武天皇の皇子神井八井耳命（かむいやみみのみこと）の孫速瓶玉命が阿蘇の国造（くにのみやつこ）に任じられたと記されている。また阿蘇神社社誌には、御祭神について次のようにわかりやすく記述されている。

一の宮　　健磐龍命たけいわたつのみこと（神武天皇様の孫神）
二の宮　　阿蘇都姫命あそつひめのみこと（一の宮御姫神）
十一の宮　　國造速瓶玉命くにのみやっこはやみかたまのみこと（阿蘇初代の國造）

阿蘇神社の神職の説明によると、祀られている十三座の祭神のうち特に重く祀られているもの

として三座をあげており、他の祭神もこの三座と近親の神様であるという。またかつて阿蘇谷は満々と水をたたえた湖水であり、阿蘇大神健磐龍命は湖水の水を切って落とし美田を開き、農耕を教え（国土の）開拓に尽くしたという。そして十一世紀以降は肥後一の宮と仰がれ、肥後の国の総鎮守神として尊崇をうけることに至っているということである。上記の祭神についての詳細な説明に加えて、さらに神職は「健磐龍命」の龍の字の由来にについて次のように話された。「火口には神霊池といわれる青いゆだまり（湯溜まり）があって、温度が高いのでそこから水蒸気が上がるのです。それが龍が天空に昇るように見えるのでしょうか。その青い色をした神霊池を御神体としているのです。」と、この話は健磐龍命は水神であり、龍神であるということに繋がっていくのであろうと考えられる。また、阿蘇神社の大宮司阿蘇家はその子孫と伝えられ、社誌には、皇室に次ぐ旧家であるとも記されている。このことは以下で取り上げる衣そそぎの神事ともかかわって来る。ここでは前述の水分神について説明を付記しておく。[水分神とは水神とともに水に関係する神であるが、日本宗教事典では、流水の分配を主宰する神で、古来、農耕と関係深く、「古事記」に天之水分神と国之水分神がみえるとされ、水神は水自体を主宰する神であり、弥都波能売神（みつはのめのかみ）が古典では水神とされると規定している。（前述の貴船社の祭神である）。]さらにこれらの信仰は後の祈祷仏教との習合により、災変を予知する国家的な霊威神・祈祷神となったといわれる。つまり一時期は国の要請を受け、噴火を予知する祈祷神としての機能を果たしていたが、それが時代とともになくなって来ると、農耕神としての役割がより強く求められるようになり、現在でも御田植祭（おんだ）・田作神事・火振神事（ひふり）・火焚神事など農耕関係の祭事を多く伝えている。このほか修験道の影響もうけ、坊中打越水神の牛馬信仰、足手荒神信仰など特殊信仰もみられる

また、山頂の古坊中には、一時期山伏や僧侶による修験道の寺院があり、前述の西巌殿寺という総称で遺蹟として残っている。山頂登山道の北側道路沿いの広範囲にわたる場所にかつては三十六坊五十二庵からなる天台宗の寺院群があったという。これらの調査が進めば農耕神としての水神についてのさらに具体的な事実も明らかになるかも知れない。

以上のことから、阿蘇信仰は、古来より火山神や国造神の信仰を基底とした火口神・水神（龍神）・水分神によるものであり、一時的には、国家的な祈祷神の役割を果たしながら、時代の要請とともに水神としての農耕神の機能が求められるに至ったということができよう。そして貴船社の水神の機能と同様に、水を分配する水分神を祀ることによって農耕開拓による農業の振興をはかり、豊饒を祈念する農耕神であったといえる。そして今でも阿蘇神社に「おんだ」や「ひふり」などの農耕祭事として引き継がれている。阿蘇山の噴火に畏怖感を持ち、大自然の脅威に畏敬をはらいながら、豊饒を祈願してきた必然性は貴船の場合にもまして切実であったと考えられる。

以下に、阿蘇山上神社の祭神（三神）や火口における神事、山頂の石神について、後日神職や西巌殿寺（現在は麓黒川の坊中にある）から寄せられた資料や話をもとに書き加えたものをあげておくこととする。

(1) 阿蘇山上神社の三神と火口における祭事について

阿蘇山上神社の祭神は、前述の通り阿蘇山の火口神であり水神であるが、ここには次にあげる三神が祀られているという（写真1　昭和33年の大噴火により壊滅し、同年建て替えられた鉄筋コンクリート造りの阿蘇山上神社社殿。神殿はなく後方の中岳噴火口が御神体である）。健磐龍

命（一の宮）・阿蘇都姫命（二の宮）・御彦子命（五の宮）である。御彦子命は健磐龍命の孫にあたる祭神であるといわれている。神職池浦氏の話によれば、阿蘇山上神社では、御幣（ごへい）を三本起てて三神を祀り、年に一回行われる「火口鎮祭」では、火口にその御幣を投げ込んで祈念するという神事が執り行われているという。さらに火口ごとに祭神が設定して祀られ、噴火の度にその火口の位置が変るので、阿蘇山測候所による火口配列図をもとに設定されるという。そして三神のご神体であるそれぞれの火口（池）に向って御幣を投げ込むのだと言われる。図1・2および表1は、後日池浦氏よりお送り頂いた火口配列図と御神体の（設置）位置を示すものである。古来

写真1　鉄筋コンクリート造りの阿蘇山上神社（社殿後方が阿蘇中岳噴火口）

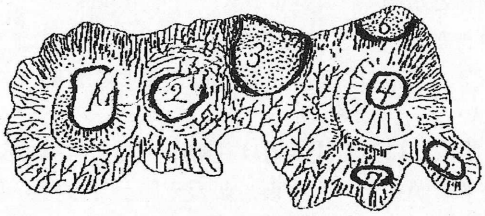

図1　阿蘇中岳火口配列図（阿蘇火口観測所　昭和9（1934）年3月発行『阿蘇火山』より）

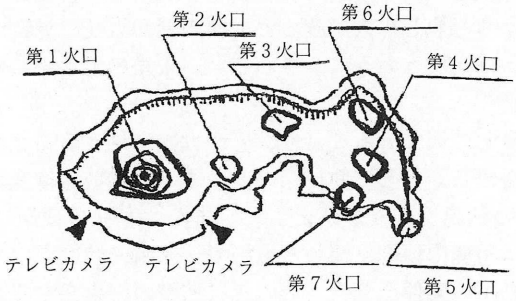

図2　阿蘇中岳火口図（阿蘇火山博物館『ASO』より）

表1　阿蘇中岳火口配列表（噴火口の古来呼称と火口番号）

火口番号 呼称者	1	2	3	4	5	6	7	8
熊本測候所	1	2	3	4	5	6	7	
	北ノ池		中ノ池	南ノ池				
古来呼称	健磐龍命 北ノ池 一ノ池		阿蘇都媛 中ノ池 二ノ池	御彦子命 南ノ池（法施崎） 三ノ池				
角田政治氏	北ノ池	中ノ池		南ノ池				
栗林謙輔氏	第一火口	第二火口	第三火口	第四火口	第五火口			
伊木常誠博士	第一火口		第二火口	第三火口	第四火口			
大森房吉博士	北ノ池甲	北ノ池乙	中ノ池	南ノ池				
納富学士	第一火口	第二火口	第三火口	第四火口	第五火口			
田中館修三学士	北火口A	北火口B	中火口	南火口B	南火口D	南火口E	南火口C	南火口A
北田正三氏	北ノ池		中ノ池	南ノ池				

資料提供：阿蘇神社より

は、北の池（一の池）が健磐龍命、中の池（二の池）が阿蘇都姫命、南の池（三の池）が御彦子命のご神体とされ、以来、火口の移動にともなって三神の位置が設定されていることが明らかである。この神事は、阿蘇山の大噴火を怖れて、それを鎮めるためのものであることはいうまでもないが、噴火による農耕への被害を避け、諸々の豊饒を水神であり農耕神である三神に祈念するものであろうと思われる。

(2) 伝説「左京ヶ橋　蛇腹」と水神

阿蘇山上神社社殿の前の神社案内に、神社の由来とともに、この地に伝わる「左京ヶ橋蛇腹」という伝説が記述されていた。水神が、古くは蛇神の形をとるという説も多くみられるので、次にその内容をあげておきたい。

> 当山上神社裏手より噴火口に至る徒歩道は往時唯一の火口への路であり且つ必ずこの橋を渡らねば登ることが出来なかった。昔左京某と云う侍がこの橋を渡ろうとした処小蛇が橋のたもとにいたので血気にはやり、武士の行く手を遮り不届きなやつとばかり刀を抜いて切り捨てようとしたら忽ち雲湧き風起、一匹の龍となって天に昇った。さすがの武士もこの大異変に恐れをなし、それが原因で早死にしたと云う。以来この橋を左京ヶ橋と称するようになったと云う。又、昔から心悪しき人が渡ると前面の岩が大蛇に見え渡ることが出来ないと云われる。事実岩の形態は蛇腹というにふさわしい。未婚の男女がこれを渡り潔き身の証としたと云う。

この伝説の蛇が龍に変身して天に昇ることや、岩が大蛇に見えることなどは、火口神のご神体が龍蛇であるという説に繋がる話として興味深い。つまり健磐龍命は龍神であり、蛇神にも由来していたということがこの伝説からうかがえよう。また、春秋の彼岸に男女が連れ立って登る「お池参り」（阿蘇登山）は阿蘇山信仰に関わるもので、未婚の娘は火口の手前にある写経橋（左京ヶ橋）を渡れることが結婚の条件とされ、この日に結婚の約束をするものも多かったという話とも一致する。したがって、この伝説は火口神である健磐龍命は蛇に由来する龍神であり、水神

であるとともに、その地域の習俗にも影響をおよぼしていたということを伝えてはいないだろうか。水神の起源を蛇神であるとする伝説として重要である。

(3) 山頂の石神と水神

石神を撮影してきた写真を拡大してみたところ、石の表面の三行に「尊壽光王龍王神・龍宮大霊最上尊・灯明連如龍王神」と刻まれているのが読み取れる（写真2)。龍宮・龍王神は共に火口神の健磐龍命と関係があるものではないかと考え、石神の由来について、西巌殿寺（学頭坊）へ問い合せたが、先代の住職によるものであるということのほかは不明であるという。もともと西巌殿寺は山頂の古坊中にあった三十六坊五十二庵からなる仏教寺院の総称であり、現在の阿蘇山上神社のある場所に本堂があったということである。それが戦火にあい全山焼失し、後に加藤清正によって黒川に再興され、ここを坊中と呼ぶようになったという。その後、明治の廃仏殿釈により、三十六坊五十二庵は廃寺となり、それらの中の一つである学頭坊を西巌殿寺とし現在に至ったという。そうした歴史の流れの中で、龍神であり水神である火口神を中心に祈祷仏教が栄えていたわけであるから、「龍宮・龍王神」の文字の使用もこの辺にかかわるものとしか推察できない。日本民俗大辞典によれば、日本の龍神信仰は龍王・龍宮の神・八大龍王・龍神などの呼び方でほぼ全国的にみられ、その起源は古いと云う。このことから考えると、龍神信仰に由来するものであるとも考えられるが、今の段階ではよくわからない。また、この石神の横に並ぶ馬頭観音は旧陸軍による馬の供養塔として建てられたものであるという（写真3)。前述した古坊中にはかつて打越水神の牛馬信仰があったということや、火口神（水神）が農耕神の機能を持つことなどを考えあわせると、火口の近くにこの馬頭観音を祀って馬の供養をしたということも理解

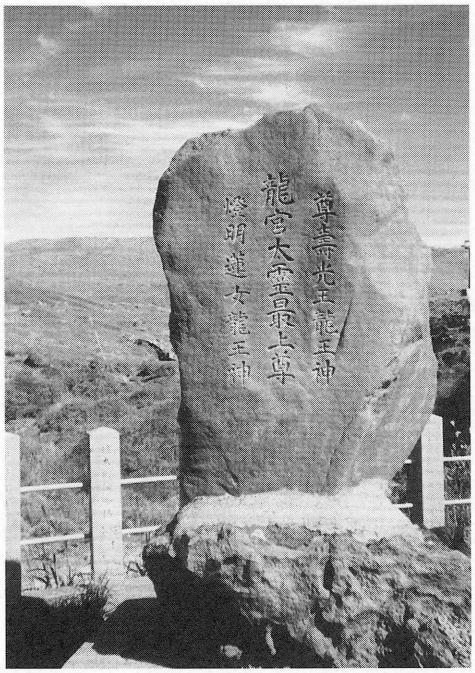

写真2　山頂の石神（右側後方が中岳噴火口）

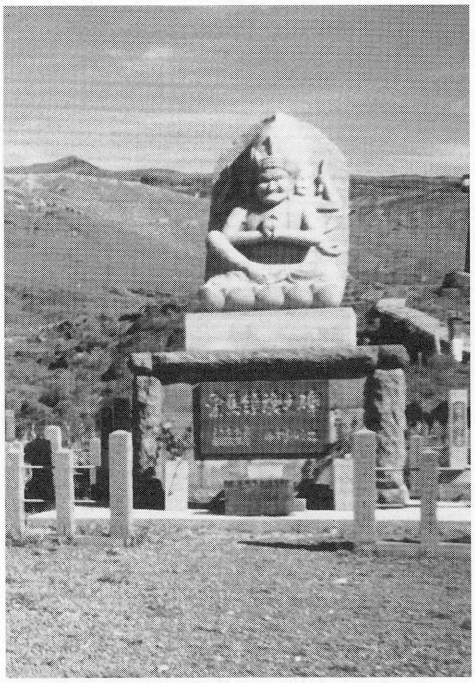

写真3　馬頭観音（後方が中岳噴火口）

できよう。またさらにこの馬頭観音と龍神（水神）の石神が並んで祀られている様子は、石田の「河童駒引考」に明らかな『馬と水神の密接なかかわり』を想起させるものである。山頂の古坊中の遺蹟や残された資料からさらに詳細が明らかになることを期待したい。

以上が山頂の阿蘇山上神社と石神にかかわる詳細であるが、ここでも阿蘇火山の噴火という畏怖による信仰がうかがわれ、火口神（水神・龍神・水分神・農耕神）に祈祷して、大自然の脅威とともに、農耕の豊饒を願って生活して来た酷しさが明らかである。とにかく阿蘇火口の山頂に三十六坊五十二庵からの天台宗の寺院があったという事実は驚きであり、火山とともに生きて来たわが国独特の生活文化であるとも思われ、日本の生活文化史を考える上で重要な史実であると思われる。次に古来より阿蘇神社で執り行われている「衣そそぎ」の神事について、諸説のもとに水神とのかかわりを考察したい。

4. 阿蘇神社の「衣そそぎの神事」と蛇の脱皮説そして水神とのかかわり

吉田敦彦の「水の神話」の中に、脱皮型の死の起源神話とともに、阿蘇神社の「衣そそぎの神事」の儀礼が取り上げられている。この神事については村崎の大著「阿蘇神社祭祀の研究」に詳しい。これは阿蘇神社で宮司の代替りの度に執り行われてきた祭事である。神社に問い合せたところ、前回の祭事は1987年11月4日に高森町上色見洗川（かみしきみそそがわ）の上洗川（かみそそがわ）神社での神事のあとに行なわれたという。「神社のすぐ下にある井川で 、宮司が晒しの白布に水をかけ、掛干（かけほし）地区にある天神社の脇にそれを干し掛けるという方法で執り行われた。この神事の由来は、阿蘇神社の祭神の健磐龍命が阿蘇谷から峠を越え、南郷谷の阿蘇都媛命のもとに妻問いに出かけた帰りに、汗で汚れた衣を洗い川の清水で洗って干したという神話にもとづいている。」吉田はこれらを比較して、「元来ならばそそがれるのは、当然白布ではなく、宮司の衣それ自体に水をそそぐか、または衣を水ですすぐことがされていたと思われる」と述べている。（吉田、1999、p.31-32）さらに村崎の神事についての推察をを取り上げ、鋭い洞察に賛同している。筆者においても、この両者の的確な洞察に導かれ同様の推論を持つに至った。そこで次に村崎による具体的な記述をあげておく。

> 衣そそぎの神事は「衣すすぎ」といわれる場合もある。今回は宮司が井川から汲んだ水を柄杓で上から白布にそそいだが、昔は井川の中に浸けて白布を「すすぐ」動作が行なわれたのかも知れない。阿蘇神社に聞くとよくわからないという。神社側は衣そそぎ、衣すすぎの言い方についてはあまりこだわっていないようである。また今回は畳んだ晒しの白布に水をそそいだが、「衣そそぎ」という名称から、本来は宮司の衣（衣服そのもの）に水をそそぐ、もしくは水の中に衣を浸けて揺り動かしてすすいだのではないかということが推察される。（村崎、1993、p.462-463）

またその後は掛干天神で、長さ10メートルの太い竹竿で社の右横につくられた掛干台に衣を厳かに干す神事が執行されたという。村崎はこの神事が、阿蘇神社宮司の即位式にほかならぬと鋭く洞察し、「衣そそぎ」は、「宮司自身（体・魂）の象徴」である衣に水をそそぐことで、「水による再生の力により阿蘇神社宮司の再生・復活をはかる」意味があったと考察し、さらに、その宮司の「再生・復活」にはまた、祖神である阿蘇神社の祭神の健磐龍命の「再生・復活」の意味があったと推論できることを、大嘗祭とも比較しながら、次のように述べている。

> 阿蘇神話では健磐龍命は名前の中に「龍」の字があることからも龍神であり、水神でもある。つまり衣そそぎの神事は龍神（水神）である始祖王（健磐龍命）の神話を即位式で儀礼

的に演じることにより、阿蘇神社宮司がまさしく龍神の子であることを示す行為であり、また阿蘇神社宮司自らが水霊と融即する行為であるともいえよう。（略）つまり宮司自身である衣に憑り付く神霊は祖神健磐龍命なのである。ここまでくれば天皇氏の即位儀礼である大嘗祭と、構造的によく似ていることに気づく。大嘗祭において天皇は神座に篭もって天皇霊を身体に付け、ニニギノミコトとして再生すると考えられている。衣そそぎの神事で阿蘇神社宮司は水をそそぎかけられることにより、祖神健磐龍命の神霊を身に付け、「健磐龍命として再生・復活」するのだ。（村崎、1993、p.486-487）

これが、村崎による龍神（水神）健磐龍命の再生・復活説である。吉田はこの村崎の分析に続き、実際に蛇が脱皮のためには水に浸ることが必要であるということと考えあわせると、元来は秘儀であったというこの神事の意味がさらによく理解できるのではないかと考察している。そして龍神であり、蛇体であると想定される健磐龍命は、化身である宮司の代替りのたびに、脱皮による再生を遂げるとみなされていた。「神体そのものの象徴である」と村崎の考察をより具体的に説明している。さらに衣そそぎに続いて行なわれた白布（宮司の衣）を10メートルもの長い竹竿に掛け渡して干す神事は、蛇の脱け殻が木の枝に長くかかった光景を表現してみせる行為であり、それによって蛇体の神の脱皮による再生が、滞りなく果たされたことを明示する意味があったのだと想定した（吉田、1999、p.36）。吉野裕子による詳細な蛇の脱皮についての記述を取り上げ、実際の蛇の脱皮と照らし合わせて神事の分析を考察している。蛇の脱皮は実際に見たことがないが、脱け殻については神棚に上がっていたことを記憶している。透けてカサカサになった脱け殻は薄い紙のようでもあり、確かに晒しの白布が乾いた状態は、蛇の脱け殻が木にかかっているようであろうと考えられる。また神事が執り行われる掛干神社の名称から推定しても、吉田の「蛇の脱け殻が木の枝に長くかかった光景を見せる行為」という分析は、充分想定可能なものといえよう。さらに吉田は、脱皮型の死の起源神話について、沖縄・宮古諸島に伝わる神話をはじめとして、東日本に分布している伝承や習俗に残る話や、オセアニアの神話における同型の類話の比較分析をしており、これらの考察を導入した神事の分析は、説得力のある内容で完結している。水神のルーツ探しの第一歩を踏み出した筆者にとって、両者の神事についての的確な洞察は、大変興味深いものであり、水神の起源を探る手掛かりを与えてくれるものとして重要である。こうした衣そそぎの神事を分析することで、健磐龍命は龍神であり蛇体であるという説が明らかとなり、蛇の登場によってそれは「水との接触により再生・復活が果たされる」という脱皮型の死の起源神話にまで遡ることとなった。ここで水神の起源を求めるには、蛇および蛇神を解明しなければならないということが明らかである。蛇の再生と不死生を農耕の豊饒と関係づけることは、多くの諸説に見られることであり、周知のように蛇は古代において豊饒のシンボルとなっていたのである。水神が豊饒をもたらすものであれば、当然そのシンボルである蛇および蛇神は水神の起源探求において重要な位置を占める。

5. まとめ

以上本稿で述べてきた貴船と阿蘇の水神探訪の結果としては次のようなことがまとめられる。

(1) 御神体についてみると、貴船においては『竜穴』から清水の湧く井戸を水神（龍神）の御神体とし、阿蘇では阿蘇火山の噴火口である神霊池を龍神の御神体としている。

(2) 地名由来・現象にみる龍の形容としては、前者はその地名由来「キフネ」・「気生嶺・気生根」

は貴船谷の大地全体から「生命生気のエネルギー（貴船社では「気」と表現）が『龍』の如く立ち昇る処」であるという。後者はご神体である火口神霊池の青い湯溜まりから蒸気が立ち昇る（騰る）現象を、祭神の健磐龍命が龍神であるとする伝説から「ご神体である健磐龍命つまり『龍神』が天に昇る現象」として捉らえている。

(3) 祭神の呼称由来については、貴船社の水神は「高靇神・闇靇神・罔象女神・国常立神・玉依姫」などである。「高靇神」は『靈』にみられるように降雨を祈願して祭器を三つ並べた字といわれる雨乞いの意味を持つ『靈』と『龍』をかさねた凄まじいまでの雨乞いを表現しており、この水神が龍神であることを意味している。また本論での述べてきたことを繰り返すが、オカミとは雷神のことであり、突如として雨を降らすのが闇靈神、遠雷となって雨を止めるのが高靈神である。そして雷神は水の恵みの神であるとともに、一方では『荒れる竜（龍）』にたとえられている。また「罔象女神」は丹生（にう）川上社から勧請した水神であり、「玉依姫」は周知のように古代神話では海神の娘豊玉姫の妹であり、神武天皇はその第四皇子とされる。阿蘇山上神社・阿蘇神社の祭神である「健磐龍命」は神武天皇の孫にあたり、阿蘇の水神であり、「龍神」である。つまり貴船と阿蘇の水神は起源神話の中において水神・龍神として繋がるのである。（注：玉依姫；玉依毘売・玉依日売とも。特定の人物をさす固有名詞ではなく、記紀においても各々別人である。いずれの玉依姫も神の御子を生んでいるが、これは神霊の憑依する神聖な女性が神の御子の誕生に関与するという、古代神話思想に基づくといわれている。（日本伝奇伝説大事典、1998、p.579）

(4) 神事における龍・蛇とのかかわりについては、火口神の祭神として阿蘇山上神社に祀られる三神の火口での神事「火口鎮祭」と阿蘇神社の「衣そそぎの神事」があげられる。前者は御神体とするそれぞれの火口に御幣（ごへい）を投げ込む神事によって龍神を鎮め、後者は「龍神であり蛇体」である祖先神の始祖王健磐龍命の「再生・復活」を表現するものである。

(5) 貴船社に伝えられる「神馬の絵馬」の由来と阿蘇山上神社の「左京ヶ橋蛇腹」伝説においては、祈雨・止雨を願う「黒馬」と「白馬」の絵馬は凄まじい雨乞い祈願の名残をうかがわせ、伝説は龍神の起源が蛇であることを示唆している。また両者において古来の人々の自然への畏怖といったものが伝えられている。

(6) 阿蘇山頂の古坊中に残された三十六坊五十二庵からなる西巌殿寺の遺蹟群は、祈祷仏教が盛んであった火山国日本の特有の生活文化を伝えるものとして重要である。

貴船と阿蘇の両者の水神において以上のように龍・蛇にかかわるいくつかの事象が認められるとともに、龍神信仰は蛇信仰を源流とするということが明らかであり、また前述のように雨乞いを祈願する龍神として、農耕神・国造神・水分神としての役割を果たして来たということが明らかである。実際に、古来より豊穣を祈念する神として人々の生活文化の中で重要な位置を占めていたということをうかがうことが出来た。

おわりに

本稿では、実際に鞍馬の貴船神社と阿蘇山の阿蘇山上神社、阿蘇神社を訪ねて水神のルーツの一端を探ってきた。貴船における凄まじいまでの雨乞い祈願、阿蘇山頂に祀られる水神、噴火口を御神体とする龍神（水神）、麓の阿蘇神社に伝わる「衣そそぎの神事」など、前述して来た事象やそこで出会ったものは龍蛇を基底としており、すべて水神のルーツを解く手掛かりとなるも

のであった。貴船の山と貴船谷、阿蘇山と阿蘇谷という類似の地形を母体として、そこに農耕の豊饒を祈願した。古代より水稲農耕を中心に生活する人々にとって水神は死活に繋がる重要な信仰対象であったに違いない。旱魃や洪水などの制御しきれない大自然への畏怖、阿蘇においてはさらに阿蘇火山の大噴火という脅威の前に畏敬をもって神を祀ったと考えられる。そして人間の力ではどうすることも出来ないそうした大自然を支配するものとして、「想像の霊獣」である龍が必要であった。水神の姿として出来るだけ強大で支配に立ち向かうことができるものが必須であった。それは荒川におけるメソポタミアの龍の由来説と類似している。「ティグリス・ユーフラテスの両河は耕地を潤す水をもたらす河であるが、ときには洪水の濁流が農耕生活を潰滅させる暴れ河でもあった。侵略者であるシュメールの王権が制圧し治めなければならないこの大河のシンボルは、政治権力を誇示するため、新石器時代からの蛇信仰をもとに、できるだけ強大なものであるべきだったのである。」メソポタミアの水のシンボルは本来は蛇であり、古代より蛇は豊饒と結びつけられて来た。水神が蛇神の姿に具象化されるのは、水稲農耕を生活の中心とする東シナ海をめぐる文化に共通するといわれている。つまり水神が龍神といわれ蛇体であることはこれらのことが源流にあるものと考えられる。そして今回、阿蘇山上神社に残る伝説「左京ヶ橋蛇腹」や阿蘇神社の「衣そそぎの神事」などにその痕跡をうかがうことが出来た。さらに吉田によれば、日本各地の習俗や伝承の中には、記紀に載らなかった神話の原型があることを指摘している。それらを掘り起こし、さらに世界的な視点から比較分析をすることによって、神話を起源としてきた諸説が議論されることが必要であると思われる。それにともなって水神の起源についても、世界的な視点での考察が進み、より具体的に推論されていくものと思われる。「稲作社会の族長がその権威の源泉をみずから水神と血がつながっていることに求め、権威の正当性を語った神話の名残」だとする説に属すると思われる水神・健磐龍命の由来も、さらに具体的なものとなっていくと考えられる。柳田国男のあとに続く多くの民俗学や隣接する分野の研究者によってかなりの部分が探求されているが、今後さらに柳田や石田の視点で、この時代の生活文化に引き継がれているもの、現在の生活の中に引き継がれている祭事や習俗、寺社で執り行われる神事などの事象を精細に観察し、採集しておくことが大切であると思われる。世紀が新たになり、ますますそうしたことの重要性を痛感するとともに、水神の起源の究明は、文明の人間生活の起源にまで遡らなければならないほど壮大で難解なことであるということに気づかされている。水神のルーツ探しの解答はその辺にあるものと考えている。古代からの大水源地である貴船と阿蘇の水神探訪は、手探りで第一歩を踏み出した筆者に水神のルーツ探しの方向と手掛かりを示唆してくれた。

付記：最後に水神祭祀についての資料提供や、丁寧なご説明を頂いた阿蘇神社神職池浦氏と貴船社神職高井氏に深謝致します。

参考文献

1）柳田国男、「水神と龍神信仰」「河童駒引」定本柳田国男全集第27巻、筑摩書房、（1980）
2）石田英一郎、河童駒引考――比較民族学的研究――、岩波文庫、（1994）
3）石田英一郎、桃太郎の母――ある文化史的研究――、講談社、（1998）

4）吉田敦彦、水の神話、青土社、(1999)
5）岡部　守、水の文化誌、論創社、(1986)
6）古家信平、火と水の民俗文化誌、吉川弘文館、(1994)
7）福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司他、日本民俗大辞典上、吉川弘文館（1999）
8）福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司他、日本民俗大辞典下、吉川弘文館（2000）
9）大塚民俗学会、日本民俗事典、弘文堂、(1991)
10）荒川　紘、龍の起源、紀国屋書店（1997）
11）池田末則・丹羽基二、歴史と文化を探る――日本地名ルーツ辞典、創拓社（1992）
12）小野泰博・奈良康明他、日本宗教事典、弘文堂、(1994)
13）篠田知和、竜蛇神と機織姫、人文書院、(1997)
14）石川栄吉・梅棹忠夫・大林大良、文化人類学辞典、弘文堂（1990）
15）村崎真智子、阿蘇神社の祭祀の研究、法政大学出版局、(1993)
16）吉野裕子、日本人の死生観、人文書院、(1998)
17）吉野裕子、山の神、人文書院、(2000)
18）国分直一、阿蘇・海と山と里の文化、新日本教育図書、(1984)
19）国分直一、東シナ海の道――倭と倭種の世界――、法政大学出版局、(1980)
20）鈴木満男、環東シナ海の古代儀礼、第一書房、(1994)
21）吉成直樹、俗信のコスモロジー、白水社、(1996)
22）岡正雄、日本民俗学大系2――日本文化の基礎構造――、平凡社、(1985)
23）乾克巳、小池正胤、志村有弘他、伝奇伝説大事典、角川書店（1998）